

部下の命が救えるなら



戊辰戦争の中、圭介は味方と間違えて敵陣の前に出たり、戦いの途中で弾がなくなるなどのアクシデントを乗り越えて北へ北へ進んでいきます。

北を目指していくなか、どんなに負けようと圭介は笑って、部下を励まし続けます。

戊辰戦争で勝ち目が無くなり、皆が「降伏するなら切腹する。」という中、圭介は「死ぬことはいつでもできる、薩長ではなく、天朝様に降伏するのだ」と皆を説得しました。

負けても笑い、切腹せず降伏したり、と馬鹿にされますが、この姿こそ圭介の凄さなのです。苦悩のすえ圭介が降伏し生き延びたからこそ日本は産業発展し、技術大国とまでなったのです。

死ぬかもしれない時でも



圭介は、役人として幕府に仕えており、国産カメラの製造や船の建造、お台場の建設などを行いました。しかし、その幕府も新政府軍に滅ぼされました。そこで、圭介は忠義のために戦うことを決意します。

最後は北海道の五稜郭で新政府軍を迎え撃ちます。しかし弾薬が尽きる等の不運も重なり、戊辰戦争で勝ち目が無くなった圭介は、皆を説得し死を覚悟で新政府軍に降伏します。

降伏した圭介は牢屋に入れられます。その牢屋は徳川幕府の時に圭介が設計した牢屋でした。自分の作った牢屋の汚さやノミ、ダニに悩まされます。

そんな牢屋の中でも囚人たちに英語を教えたり、書物を読み、日々勉強していました。死ぬかもしれない時でも圭介の学びたい気持ちを抑えることはできませんでした。

Q 圭介たちが立て籠もった「五稜郭」と圭介にはどのような関わりがあるでしょう?

A 「五稜郭」の建築に、圭介が翻訳した「築城典刑」という本が活躍します。「築城典刑」は福沢諭吉も翻訳していましたが出版されず、圭介の翻訳を活版印刷したものが広まり、建築には圭介のものが使われました。戦争に負けたのに、のちのち出世していく圭介の才能に嫉妬する人もいました。

Q 圭介が牢屋の中から手紙を出した相手は誰でしょう?

A 圭介は牢屋の中から母に向けて手紙を出します。その手紙は「生きて牢屋を出ることができたなら、今までできなかった親孝行をします。楽しみにしてください。」という内容でした。投獄されていた圭介は知りませんでした。この時すでに母は亡くなっていました。牢から出た圭介の悲しさはどれほどのものだったのでしょうか。